



神戸大学近世地域史研究会活動報告（＜活動報告＞）

室山，京子

(Citation)

Link : 地域・大学・文化 : 神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報, 16:89-92

(Issue Date)

2024-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100499194>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100499194>



神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター活動報告

神戸大学近世地域史研究会活動報告

室山 京子

一 神戸大学近世地域史研究会と
善龍寺文書について

神戸大学近世地域史研究会は二〇〇六年三月に発足し、兵庫県内南部等に在住する市民の方々と江戸時代の史料を読み解く活動を続けてきた。史料はたつの市など播磨地域のものが中心であり、原則として神戸大学を例会場所として毎月一回日曜日の午後で開催した。例会では、割り振られた担当箇所を発表する形をとり、報告担当者は翻刻文を読みあげるだけでなく、内容を理解するため語句や関連文献を調べて発表をおこなった¹⁾。二〇一六年から翻刻作業に取り組んだのは、たつの市龍野町上川原の

真宗大谷派寺院である善龍寺の文書である。当研究会会員が二〇一五・二〇一六年に善龍寺を複数回訪問し、目録作成や写真撮影などの調査をおこなった。その点数は七三〇点となり、江戸時代が二二六点、明治以降が四九一点、年未詳が一三点である。

善龍寺は龍野藩初期の藩主となった京極氏に従い近江・松江から龍野へ移動した寺院である。その後、京極氏が龍野から丸亀へ移封する際には建物と共に移され、龍野には新たに建て直されて寺が残ったと伝えられている²⁾。二〇〇三年八月の「善龍寺本堂再建趣意書」によれば、近江よりやってきたのは法性房玄智（龍野初代）で、万治元年（一六五八）京極氏が丸亀に移ったあとと隠居所として娘とともに龍野にとどまり

婿養子をとったという。その後、寛文十二年（一六七二）脇坂氏が龍野藩主となり菩提寺として宝幢寺を建立する際には善龍寺の境内地の半分を献上した。一六八〇年頃に再建された本堂には、脇坂氏より提供された木材が使用され、三代南立の時、本山より「琵琶湖山善龍寺」の寺号を許された（以上「善龍寺本堂再建趣意書」）。

このような由緒をもつ同寺であるが、『龍野市史』には善龍寺文書が若干取り上げられているものの³⁾、同寺の有り様について詳しい記述はほとんどなく、未解明な点が多い。当研究会では未公開の史料の翻刻に取り組んだが、参加者が取り組みやすいもの、江戸時代における善龍寺の様子がわかるものをじっくりと読み進めた。その成果が二〇二四年二月に刊行した『播磨国龍野城下における寺院と地域——真宗大谷派善龍寺文書翻刻集——』（以下、『善龍寺文書翻刻集』）であり、神戸大学学術成果リポジトリにも掲載している。以下、『善龍寺文書翻刻集』の内容を紹介することで、当研

研究会の活動報告とする。

二 『善龍寺文書翻刻集』について

前述のように、取り組みやすくじっくり読み進められるものとして参加者と相談しながら選定したのが、宗門送り手形類、仙石騒動の裁許の写し、「御本殿御地頭御触記録」、讃岐国丸亀藩の善龍寺に関するものである。四つ目は善龍寺金森憲了住職から希望があり当研究会で読み進めることになった。『善龍寺文書翻刻集』では、各史料翻刻の冒頭に「翻刻担当」「翻刻期間」および「解説」を掲載し、「解説」は研究会で議論になったことを含めた。また、翻刻文とともに各自が調べた用語解説や補足の表を掲載した。『善龍寺文書翻刻集』を読み返す参加者に研究会での様子を思い出していただけるよう、また、初めて手にする方にとっては研究会の雰囲気的一端を感じ取ってもらえるようにという思いを込めてまとめた。

「一 宗門送り手形類」は、善龍寺文書のうち、宗門送りおよびそれに関連する史料

三〇点を収載した。類似した形式であったため、「飽きてしまった」という感想を漏らした参加者もいたが、江戸時代における善龍寺の檀家の範囲は不明であるため、その有り様がわかることを期待し読み進めた。明和五年（一七六八）から慶応三年（一八六七）の約一〇〇年間に三〇点という点数は決して多くはないが、以下のことがわかった。

- ① 善龍寺は近隣地域のみならず、離れた場所の檀家の寺請もしていた。宍粟郡山崎のように、直線距離にして一五キロ以上の場所もあった。
- ② 龍野藩のみならず、異なる領主の支配地域の檀家を寺請していた。
- ③ 百姓身分だけでなく、武家の檀那寺でもあった。

次に取り組んだのは「二 仙石騒動裁許」である。物語のあるものを、と希望する声があり、近世後期に起こった但馬国出石藩のお家騒動である仙石騒動に関する史料を選んだ。例会での読み合わせに際しては、

本史料に誤記が多かったこともあり、宿南保『仙石騒動』のほか、松浦静山「甲子夜話」『東洋文庫』平凡社）、豊岡市立図書館「郷土資料デジタルライブラリ」の出石藩「御用部屋日記」などを参考にした。本史料は登場人物が多かったため、例会では前掲『仙石騒動』などを参考に登場人物整理をおこない、『善龍寺文書翻刻集』にも一覧表を掲載した。なお、善龍寺に仙石騒動の史料がある理由については、幕府評定所構成員の一人として寺社奉行であった龍野藩主脇坂安董がいたことから、脇坂家が事件裁許に関与したことに関係していると考ええる会員が多かった。また、仙石久道妻の常真院ら江戸在住の藩主家族および仙石一族の動きに注目することが必要との指摘があった。読み合わせ終了時には仙石騒動の総括を希望する声があったが、いずれも整理・分析にはいたらず課題として残っている。

新型コロナウイルスの問題が深刻化する直前から読み始めたのが「三 御本殿御地頭御触記録」である。二〇二〇年四月は研究会を取りやめ、翌五月からオンラインでの研究会を開始した（二〇二一年一二月か

ら対面・オンラインのハイブリッド方式となった。『御本殿御地頭御触記録』は弘化三年（一八四六）から文久二年（一八六二）頃までの本山である東本願寺および領主である龍野藩からの通達や両者への対応の記録である。四八件の記事があり、幕末という限定された期間ではあるものの、善龍寺の活動の詳細が判明する貴重な内容である。特に本山からの使僧に関しては、真宗寺院だけでなく龍野藩が対応したことが記され、贈答品・料理の品書きは具体的に興味深く、応接の所作は再現できるほど細かな記述であった。また、龍野藩は一時期幕府からの御預り地を管理しており、その一つである美作国での真宗寺院の争論に龍野藩士が派遣されたことを記すなど、龍野藩の御預り地支配を考える材料となり得る。

最後に取り組んだのは「四 讃州丸亀善竜寺文書」である。大名京極氏の転封にともない丸亀に移転した善龍寺に関する史料で、史料原本は現在香川県立ミュージアムが所蔵し、香川県立図書館には原稿用紙に手書きされた翻刻文の複写物が所蔵されている。史料の前半は嘉永二年（一八四九）

の丸亀善龍寺御坊昇進に関するもの、後半は元治元年（一八六四）七月に起きた禁門の変により東本願寺が類焼の被害を受けたことに対する「御悲歎御書写」である。特に史料前半の御坊昇進については、『大日本寺院総覧』に丸亀善龍寺が「東御坊」となったと記されているもののその年代は記されず、『丸亀市史』『新修丸亀市史』には御坊に関する言及がないため、本史料は詳しい経緯を示す貴重な内容である。具体的には、善龍寺の御坊昇進が法中内の均衡に変化をもたらしかねないと不安視されたことが記されており、一足飛びで「東御坊」となったのではなかったことが判明した。秩序が変化する際に示す関係者の反応を考える材料となろう。

以上が『善龍寺文書翻刻集』の内容であるが、当初、校正作業は会員で分担することになっていた。しかし、編集を担当した筆者の作業が思うように進まず、結局校正作業をお願いすることができなかった。会員の皆様とともに報告書を仕上げることは叶わなかったものの、入稿原稿データを会員にメールで送信したところ、間違いを指摘

してくださった方がおられ印刷前に修正することができた。

善龍寺へは三月八日に報告書を持参した。会員へは三月一二日に「報告書の手渡し会」を実施し筆者を含めた三名と退会した一名の計四名が久々に再会した。そのほかの方々へは郵送した。報告書という形になったことで、各自のレジュメが一連のものとしてまとまり、蓄積した成果が可視化されたことで、会員たちから喜びの言葉をいただくことができた。

当研究会は二〇二三年度末をもって活動を停止した。本報告書は活動を一区切りするタイミングで刊行したことになる。これまで当研究会の活動をご支援くださった皆様に心からお礼を申し上げる。

註

（１）研究会では研究成果として、「播磨新宮・池田家史料の紹介」（『歴史文化に基礎をおいた地域社会形成のための自治体等との連携事業（６）』（二〇〇八年）、『観聞記』の世界―播磨国からみる江戸時代―」（二〇一〇年）（二〇一二・二〇一五・二〇一七年）が

る（いずれも神戸大学大学院人文科学研究科地域連携センター発行）。また、研究会の活動紹介については室山京子「神戸大学近世地域史研究会について」『LINK』一〇、神戸大学大学院人文科学研究科地域連携センター、二〇一八年）、同『『観聞記』の世界』（神戸大学近世地域史研究会活動報告書）の紹介」（『播磨学紀要』二三、播磨学研究所、二〇一九年）、同「地域歴史資料を学び楽しむ「場づくり」（『ヒストリア』二八二、二〇二〇年一〇月）などがある。なお、研究会運営

は設立から二〇一五年まで神戸大学大学院人文科学研究科非常勤講師（当時）河野未央氏が担当し、二〇一六年筆者が引き継いだ。

（2）『龍野市史』第二巻、一〇〇頁。

（3）善龍寺文書としては、『龍野市史』第一巻七三九〜七四一頁で嘉永元年「龍野領町在寺院開基本寺并道場本書」を整理した「表四七 龍野藩領内の真宗寺院」、『同』第五巻（史料編）一八六〜七頁には龍野藩京極氏時代の城下寺院の記録に関する史料を掲載している。

丹波市青垣町山垣区での地域連携事業の展開

——区有文書の活用を中心に——

一 はじめに

丹波市と神戸大学大学院人文科学研究科は、平成一九年（二〇〇七）に、地域歴史遺産の活用や、活用に携わる人材の育成を目指す

して、「丹波市と神戸大学大学院人文科学研究科との地域活性化の連携協力に関する協定」を締結した。以降、丹波市と神戸大学大学院人文科学研究科地域連携センターは、地域住民と連携しながら、市域に残された古文書を中心とする歴史資料の調査・研究、

出水 清之助

保全・活用に、一五年以上にわたって取り組んできた。

筆者自身は、大学院に進学した平成二七年（二〇一五）以降、同事業の調査等に関わりはじめ、令和三年（二〇二二）以降は、教員の立場として地域連携センターのスタッフの一員となり、井上舞氏（人文科学研究科特命講師）とともに同事業の主担当をつとめている。

今回はそうした丹波市との地域連携事業の中から、この間自身が関わった、青垣町山垣区での活動について紹介したい。

二 山垣区について

紹介に入る前に、山垣区の地理的・歴史的な基本情報を紹介しておきたい。現代の山垣区につながる近世の山垣村は、丹波国氷上郡（現丹波市）の最北部に位置しており、北は但馬街道を経て但馬国朝来郡（現朝来市）に、東は梨の木峠を越えて丹波国天田郡（現京都府福知山市）に通じるなど、国境・郡境に近接する交通の要衝であった。山垣村は、但馬丹波の境をなす遠坂峠を